



尾道楽天地界限～花街と芸能娯楽のパラダイス～
2025(令和7)年5月30日(金)～10月22日(水)



かつて尾道には、「楽天地」とも呼ばれた歓楽街が、久保新開・新地エリアに広がっていました。楽天地とは、娯楽の場を意味する言葉で、たとえば大阪市中央区千日前（旧南区難波新地）にあった複合型娯楽施設「楽天地」が有名です。

江戸時代、北前船の寄港地として栄えた尾道は、商業の発展とともに歓楽街もまた発展していきました。新開・新地は、芸妓や娼妓が行き交い、色香を漂わせていたかつての花街であり、芝居や映画、音楽などの芸能娯楽が集まる、尾道を代表する一大レジャー＆ナイトスポットでもありました。

やがて、法の施行や時代の流れなどにより花街は姿を消し、飲食店街へと変化していきます。1979(昭和54)年6月1日に発生した戦後の尾道で最大といわれる久保大火では、喫茶店、クラブ、バーなど多くの店舗や民家が焼失し、大きな被害を受けました。

それでもなお大火を乗り越え、地域住民や飲食店、行政が一体となって取り組んできた新開地区の活性化事業は、長い年月を経て、いま実を結びつつあります。新しい店舗のオープンやイベントの開催を通じて、新開にはつねに新しい風が吹き込まれています。

「新地芸妓に新開娼妓」とうたわれた尾道の新開・新地は、中国地方でも古くから知られた歓楽街でした。現在の住所では久保二丁目付近にあたり、名の通り新しく造成された土地です。古地図からその成立と変遷をたどることができます。

大正から昭和初期の市街図には、「新開」は仲之町通りを挟んだ北側、「新地」は相生通り南側の海沿いを指していました。江戸時代には現在の川端通りに防地川が流れ、厳島神社（後に八坂神社を合祀）も海辺に位置していました。現在のおのみち歴史博物館の北には、船だまりもあつたとされています。

造成の始まりは1690（元禄3）年、久保町の松本千之助が申請し、1698（元禄11）年に工事が開始されました。1750年代には米場新地や沙寄場新地（久保新開）などが整備され、地域はさらに広がります。

1779（安永8）年には、土堂町の遊廓が華美すぎるとの理由で廃止命令を受け、久保新開へと移転。これにより、新開・新地は遊廓街としての性格をより強くしていきます。

1853（嘉永6）年の遊廓格付け番付「諸国遊所見立角力並に値段附」や「国々湊くらべ」には、尾道が安芸の御手洗、備後の鞆と並び記載されており、地域内外にその名を轟かせていたことがわかります。藩の出張記録『尾道表出張中日記帳』には、竹亭・鶴亭・胡半といった遊廓や芸娼妓の名も記されており、尾道の花街が瀬戸内随一の賑わいを見せていたことを物語っています。



江戸時代の新開界隈
（尾道町絵図 1821（文政4）年 尾道市立中央図書館蔵）

花街今昔 ～尾道に見る『花街』の世界～

商店街が閉まり始めると、新開・新地の各館では掃除に打ち水を終えて、玄関脇には盛り塩が置かれます。身支度を終えた芸娼妓たちは、下駄の音をはずませながら明神さん（厳島神社）や周辺の稲荷さんにお参りました。

同じ花街といっても、新開と新地では家屋の構えや雰囲気に対し少し違いがありました。これは、新開には娼妓、新地には芸妓と主役が異なっていたことに関係しているのかもしれませんが。娼妓とは、歌や舞をまったり、公的に売春を許されていた女性たちのことで、芸妓とは歌舞や音曲、鳴物で客をもてなす女性たちのことです。どちらも置屋と呼ばれる家に所属し、客の求めに応じて出向いていました。

江戸時代、尾道は北前船の西廻り航路上にある重要な港町として栄え、商業の発展とともに花街も賑わっていきました。しかし、明治時代以降の花街は、時代の流れとともに栄えたり、衰えたりを繰り返していきます。

1872（明治5）年、明治新政府によって芸娼妓解放令（人身売買の禁止）が公布されると、尾道でも在留2名を除き、ほとんどの芸娼妓が一斉に帰郷、新開・新地は一時衰退します。

その後、1877（明治10）年、広島県は営業場所を限定したうえで、「貸座敷娼妓渡世規則」第一条により、尾道を含む4カ所での貸座敷（揚屋）の営業を許可しました。

大正時代にはいると、1915（大正4）年発行の『尾道案内』には「遊廓」の項が設けられ、新開・新地の復活が窺えます。同書によると、当時の尾道には置屋36軒、お茶屋19軒、芸娼妓98名が在籍していました。1926（大正15）年には尾道警察署による調査が行われ、楼主たちの自主的な待遇改善も進められていきます。

昭和初期、1930（昭和5）年の『全国遊廓案内』によると、尾道には貸座敷は78軒、娼妓は220名と大正時代よりは増えたものの、経済の低迷と共に、客足は乏しくなりました。この年の地元紙『芸備日日新聞』の記事には、「この頃は遊客は皆無といふ有り様で（中略）近頃の新地新開付近は毎夜閑古鳥が鳴いている」と伝えられ、衰退の様子が窺えます。ところが、戦時下に入ると、軍需工場並みに海運界が活気づくに従い、新開・新地も近年稀にみる好景気にみまわれました。

1945（昭和20）年の終戦後、アメリカの占領軍が広島・呉地区に進駐し、各地に慰安所が開設されました。尾道からは、安芸郡海田市町の慰安所へ娼妓が派遣されたことが記録に残っています。翌年、GHQ（連合国軍総司令部）は公娼制度の廃止を命じ、制度は事実上の終焉を迎えました。

1948（昭和23）年、性病対策の観点から、当時22軒あった遊廓は相次いで閉業し、建物はホテルや喫茶店に転用され、87名いた芸娼妓の多くは帰郷、あるいは喫茶店の給仕や他の職業につくようになりました。こうして、江戸時代中期から続いた尾道の伝統的な花街は、ひとまずその歴史に幕を下ろしました。

しかし、その後もしばらくの間、特殊飲食店（特飲店、俗に赤線と呼ばれる）としての形は残りました。1951（昭和26）年には、特飲店がおよそ30軒、芸娼妓120名と再び増加の兆しを見せ、1953（昭和28）年には、新開を正式な赤線区域とする要望が出されました。

1957（昭和32）年に売春禁止法が公布され、翌年4月に施行が決定すると、尾道ではその直前の2月、解散式が行われました。花街の最後の日々は、多くの閉業を惜しむ客でにぎわい、最後まで働いた女性たちは、帰郷、就職、結婚など、それぞれの道を歩み始めていきました。

売春禁止法施行後、尾道商工会議所や尾道市社会福祉事務所が、転業した店舗と協力して、新しい新開・新地の街づくりを模索しました。尾道商工会議所では「楽天地街観光対策懇談会」が開かれ、観光都市としての新たな未来に期待を託しました。

新開・新地は、「楽天地」とも呼ばれたその名のとおり、花街や飲食街としてだけでなく、娯楽や芸能の盛んな地域でもありました。「楽天地」という名前です。で広く知られているのは、大阪市中央区千日前(旧南区難波新地)で、映画館や劇場など、さまざまな施設が集まった複合型の娯楽地として多くの人に親しまれていました。

江戸時代、1821(文政4)年の「尾道町絵図」によると、新地にあたる現在の尾道市教育会館付近に「芝居小屋」と記されています。これが後の「偕楽座」と呼ばれる劇場の前身と見られます。「偕楽座」について記されている最も古い資料の一つが、1915(大正4)年発行の『尾道案内』で、定員2000人の大劇場であったとされています。

「偕楽座」は3度の火災にみまわれ、1924(大正13)年の再建築時には、木造3階建てで^{ますせき}樹席を備え、廻り舞台と長い花道を持つ、本格的な上方歌舞伎の常設の芝居小屋として知られていました。しかし、戦前に発行された『尾道市史』によれば、演劇だけでは経営が難しくなり、やがて、活動写真館(映画館)へと転換されました。1938(昭和13)年の3度目の火災を機に、再建は叶わず、現在は「偕楽座」の裏庭にあったとされる芝守稲荷だけが残されています。

戦後、その跡地には「尾道セントラル劇場」という洋画専門の映画館がオープンしました。定員は750人、座席数は400席で、この劇場では、邦画作品では満足できない知識人の期待に応える洋画作品を上映し、他館に先がけてワイドスクリーン方式「シネ・スコープ・スクリーン」を導入するなど、時代を先取りする設備でも注目を集めました。

その後、「尾道セントラル劇場」は、尾道商工会議所会頭・金尾馨氏(当時)によって買収され、1958(昭和33)年1月21日に閉館、以降は尾道市公会堂ができるまで市民の憩いの場として提供するとして、「尾道会館」と名前を改めて再出発しました。再開後初の催しとして大衆演劇一座の公演が行われ、続く4月には山陽日日新聞社主催のお笑い演芸大会が開催され、定員1800人に対して約5000人も観客が詰めかける盛況ぶりを見せました。

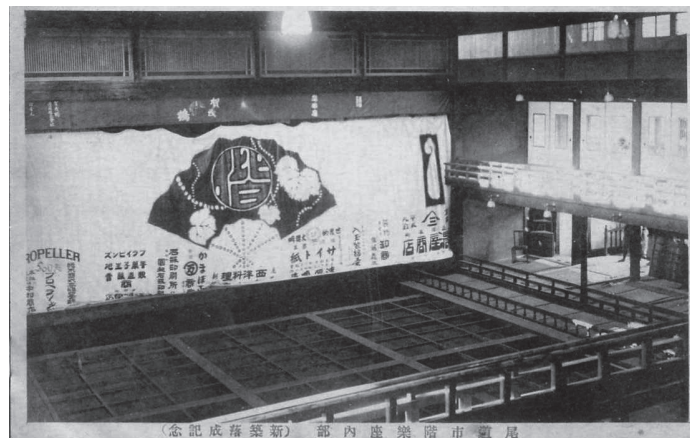
1965(昭和40)年以降は「尾道文化会館」と名前を変え、劇場からボウリングセンターへと用途を変えながら存続しましたが、最終的には市によって買い取られ、共同福祉施設となったことで、娯楽施設としての役目を終えることとなりました。

一方、新開周辺には、新開の北側に隣接する勧商場に、1899(明治32)年頃から1901(明治34)年頃まで、3階建ての寄席「玉浦座」が存在していました。

さらに、大正時代から昭和にかけては、当時の娯楽の王様といわれた劇場や活動写真館が集まり、1955(昭和30)年に迎えた最盛期には、大阪市の千日前にあやかって「千日前」と命名されました。その場所は、水尾通りから東に折れた通りで、現在、米徳や鳥徳などの飲食店が軒を連ねている界限です。この通りには、玉栄館(後の尾道東映)、松栄劇場(後の尾道東

宝)、大映スバル座、興栄座(尾道日活)と、4館もの映画館が立ち並び、一大レジャースポットとして賑わい、これらの映画館を所有していた備南興栄社長・盛久慎蔵氏(当時)が、千日前を「市民のパラダイスにする」と語っています。

やがて昭和も後期にさしかかり、「千日前」の入場者数減少が地元新聞に報じられ、楽天地としての斜陽化が進みました。「千日前」は、最も歴史のある映画館であった「尾道東映」(玉栄館の後身で、大正時代には「世界館」という活動写真館、さらにその前は「岩井座」という寄席)を最後に、「千日前」はその幕を閉じました。



偕楽座の写真絵葉書(尾道学研究会蔵)

尾道マッチ今昔物語より 尾道楽天地界限のアノ店コノ店

マッチが企業や個人商店などの、実用性を兼ね備えた小さな広告媒体として、広く使われるようになったのは、明治時代以降のことです。そのようなマッチは「広告マッチ」と呼ばれました。

尾道でも、さまざまな広告マッチが作られてきました。多くは飲食店のもので、なかでも喫茶店やクラブ、バーなど夜のお店が大半を占めています。江戸時代から遊廓や芝居小屋でにぎわった久保新開・新地周辺に店舗を構えるものが多く、尾道の伝統的な花街文化が、姿を変えながら今なお息づいていることがうかがえます。

近ごろでは、広告マッチを置くお店もすっかり少なくなってしまう印象がありますが、ラベルを手にとって眺めてみれば、当時の新開や新地の風景や、そこで過ごした楽しいひとときがふとよみがえってくる…そんな方もいらっしゃるのではないのでしょうか。まるで、ひとときの時間旅行をしているかのような気分させてくれます。



楽天地界限のお店(ナイト・スポット)の広告マッチ(個人蔵)

住宅が密集する尾道の中心市街地は、これまでも幾度となく拡大延焼による大火に見舞われてきましたが、戦後最大級の被害となったもののひとつが、1979(昭和54)年6月1日に発生した久保二丁目9街区の大火です。

この火災では、喫茶店やクラブ、バーなどを含む約68棟が全焼、半焼、部分焼となり、被害面積は約4400平方メートルに及びました。

朝5時40分に通報を受けた尾道地区消防署本部と消防団をはじめ車両100台、消防隊員660人が出動しました。長江一丁目^{な が え}の大山寺や東土堂町の千光寺の早鐘が鳴り響く中、久保本通りと尾道市公会堂を中心に、東西両面からホースを引き込み、消火活動にあたりました。

早朝の発生だったものの、乾燥注意報が出ていたうえに、肩が触れ合うほどの狭い路地や、密集した木造家屋、さらに多くの建物が増築されていたことなどが、通報の遅れや延焼の拡大を招いたのではないかと、翌日の地元紙『山陽日日新聞』が伝えています。

この大火を受けて、旧尾道市公会堂(現在の尾道市役所周辺)東側の公有水面を埋め立て、商工会館を建設する計画は、消防用水確保の必要性から見直されることとなりました。また、密集地における日常的な防火訓練の実施が不十分だったことも問題視されました。

焼け出された人々は、旧筒湯小学校の体育館に一時的に身を寄せることとなりました。尾道市は、それぞれの被災の状況に応じて、見舞い金や物資を送り、各所・各方面からも支援が寄せられました。

大火からの復興に向けて、被災地はニュー歓楽街「ハッピー久保」として再整備され、1981(昭和56)年7月26日には竣工式が執り行われました。整理事業は、施工面積3891平方メートル、1979(昭和54)年度からの2年間にわたり実施され、総工費は当時の金額で約4億509万7千円にのぼりました。

新たな歓楽街としての再出発を遂げましたが、そこには罹災者一人ひとりのさまざまな犠牲と、数多くの教訓が刻まれていました。本事業は、都市防災と地域再生の両面から、後世に語り継がれるべきモデルケースとなったのです。



久保大火記録写真
『消防年報 尾道消防(自治体消防)発足50周年記念号』
(1998年発行)

大火を乗り越え、ハッピー久保として生まれ変わった新開地区は、2009(平成21)年、尾道市議会予算特別委員会において、城間和行市議(当時)が、尾道の歴史を支えてきた新開の歩みを振り返りながら、これまで商店街に偏っていた行政支援を新開にも広げる必要があると訴えました。

この発言を契機として、「防災」と「飲食店の活性化」をキーワードに、地域住民や飲食店、行政などが一体となり、新開の現状把握と対策について幾度となく意見交換が行われました。

2012(平成24)年2月に尾道市市民提案事業に採択され、城間氏が代表を務める「新開の未来を考える会」主催で、「しんがいシンポジウム2012」が開催され、地元有識者や学識経験者などをパネリストに、防災的観点や必要なまちづくりについてシンポジウムを行いました。以降、空き家、空き店舗などの現状調査や地域住民や飲食店、行政の意見交換会が幾度となく行われました。

2015(平成27)年12月には、翌年4月から運行が予定されていた「尾道・広島空港線バス」によるインバウンド効果に備え、外国人観光客の受け入れ環境の整備が進められました。その中で、夜型の観光資源として新開の活性化にも期待が高まりました。

翌年には、新開を昼間からもにぎわう街にしようと、雑貨店など「ショップハウス事業」が始まりました。さらに、海外の事例を参考に、美食を楽しめる観光スポットとしての発展もめざしました。その中で、バルの軽食から着想を得て、「尾道ピンチョス」が考案されました。

2017(平成29)年、新開地区では空き店舗支援事業がスタートし、空き店舗を活用した4店舗が新たに開業しました。さらに、同年にはおよそ500人が参加した「尾道新開フェス」が開催され、ピンチョスの提供や新開のプロモーション動画コンテストも行われました。「一時的な流行で終わらせたくない」という声もあがり、地域の継続的なにぎわいづくりが意識されるようになりました。

その後も、空き店舗の活用は民間の新規事業のきっかけとなり、2018(平成30)年には市の補助金を活用した2店舗の開業に加え、自力で開業した店舗も増え、前年度から数えて16店舗が新たにオープンしました。これにより、新開にある約130軒の空き店舗のうち、1割強が活用されることになりました。

地域住民、飲食店、行政が一体となって取り組んできた新開の活性化は、今も実を結びつつあります。新しい店舗のオープンやイベントの開催を通じて、新開にはつねに新しい風が吹き込まれています。

